

書 評

カール・ポランニー著
 『市場社会と人間の自由－社会哲学論選』
 (若森みどり・植村邦彦・若森章孝編訳)
 (大月書店、2012年5月)

太 田 仁 樹

ポランニー・ブームである。「大転換」という語を含むタイトルを持つ日本語の書籍は、今世紀に入って以降で75冊に及んでいる。「大転換」という語は日本語表現として以前からあるものであるが、これらの著作の多くは、ポランニーの『大転換』（初版、1944年、日本語訳、ポラニー [1975a]、新訳、ポラニー [2009]）を意識して、標題にこの語を入れている。

佐伯啓思『大転換：脱成長社会へ』（佐伯 [2009]）は、自己の時代認識を気侃に開陳したエッセイであるが、「あとがき」で自己の認識とポランニーの時代認識との類似性と差異性を述べている。全く異質な思考傾向の者によって、内在的な理解を踏まえずに言及されるようになると、その著作は既に「古典」の域に入ったと言ってよいであろう。大転換の著者、ポランニーもそのような古典的思想家の仲間入りを果たしたと言えよう。

タイトルに「大転換」を含まなくとも、ポランニーの論理を用いて、資本主義世界の行き詰まりを明らかにしようとする試みも見られる。内橋克人『悪夢のサイクル：ネオリベリズム循環』（内橋 [2006]）は、市場原理主義が社会を解体し、戦争を呼び起こしていく、世界と日本のありさまを解明している。内橋のスタンスは、ほぼポランニーのそれを継承するものといえる。

一方、中谷巖『資本主義はなぜ自壊したのか：「日本」再生への提言』（中谷 [2009]）は、市場原理主義の旗振りをしてきた著者が自己の立場変換（＝「自戒」）を表明する作品であるが、ポランニーの市場社会論から「つまみ食い」をして、「自戒」の真面目さをアピールするために『大転換』を利用している。

このような「つまみ食い」は、ポランニー研究と称する著作においても見られる。佐藤光の著書『カール・ポランニーの社会哲学：『大転換』以後』（佐藤 [2006]）は、博士号の請

求論文（大阪市立大学）であるから、学術的研究として扱われるべきものであろう。しかし、その内容はポランニーを「反社会主義者」・「保守主義者」と描くことに終始しており、ポランニーの言説をそのテキストと時代状況のなかで理解するという、学術的研究の前提条件を欠いたものとなっている。（この著者は、証拠捏造で有名な「労働問題研究者」の議論に全面的に依拠しているところから見ると、そもそも学術的研究の前提という問題に無頓着であると思われる。）

ポランニーの著作の日本語への翻訳は、1975年と1980年に集中的におこなわれている。すなわち下記の5点である。

1. 『大転換：市場社会の形成と崩壊』（ポランニー [1975a]）。
2. 『経済と文明：ダホメの経済人類学的分析』（ポランニー [1975b]）。
3. 『経済の文明史：ポランニー経済学のエッセンス』（ポランニー [1975c]）。
4. 『人間の経済Ⅰ：市場社会の虚構性』（ポランニー [1980a]）。
5. 『人間の経済Ⅱ：交易・貨幣および市場の出現』1980年（ポランニー [1980b]）。

上記の2と3は、2004年と2003年に『ちくま学芸文庫』（ポランニー [2004]、[2003]）として再刊された。「小泉改革」によって市場原理主義の弊害が一部の人にはあれ、明白となってきた時代状況を反映したものといえよう。しかし、ポランニー [2003] の「あとがき」を、佐藤光が執筆するという非学術的状況は持続していた。

ポランニーの全体像を学術的手続を踏まえて描くという試みをわれわれが手にすることができるようになるのは、2009年に野口建彦と栖原学によって『大転換』の「新訳」が発表され、新訳作業の牽引者である野口の著作（野口 [2011]）と、近年テキストに内在する研究を続けてきた、若い世代の若森みどりによるポランニーの生涯に即した著作（若森 [2011]）の出現を待たねばならなかった。

本訳書、『市場社会と人間の自由：社会哲学論選』は、自由の概念を軸にポランニーの知的営為を分析した若森みどりの構想により、膨大なポランニーの未邦訳論考のなかから重要だと思われるものを訳出し、ポランニーに即してポランニーを理解する道を日本語読者に開こうとするものである。

本訳書に収録された論考は以下のとおりである（括弧内に公表年あるいは執筆年を付す）。

第Ⅰ部 市場経済と社会主義

第1章 われわれの理論と実践についての新たな検討 (1925年)

第2章 自由について (1927年)

付録1 マルクスにおける「ある」と「あるべき」

付録2 個々人に対する疎外の作用

第Ⅱ部 市場社会の危機、ファシズム、民主主義

- 第3章 経済と民主主義 (1932年)
 第4章 ファシズムの精神的前提 (1933年)
 第5章 ファシズムとマルクス主義用語——マルクス主義を言い換える (1934年)
 第6章 共同体と社会——われわれの社会秩序のキリスト教的批判 (1937年)
 第7章 ヨーロッパにおける哲学の対立 (1937年)
 第8章 ファシズムのウィルス (1940年代初頭)

第Ⅲ部 市場社会を超えて——産業文明と人間の自由

- 第9章 複雑な社会における自由 (1944年)
 第10章 普遍的資本主義か地域的計画か? (1945年)
 第11章 議会制民主主義の意味 (1945年)
 第12章 経済決定論の信仰 (1947年)
 第13章 ジャン・ジャック・ルソー、または自由な社会は可能か (1950年代央)
 第14章 自由と技術 (1955年)
 第15章 アリストテレスの豊かな社会論 (1959年)

ポランニーを、彼の生きた時代のなかで理解するという研究動向は、21世紀に入って国際的に大いに前進した領域である。なかでも注目されるのは、カンジャーニとトマスベルガー編集のドイツ語版論文集全3巻 (Polanyi [2002], [2003], [2005]) とカンジャーニとモクラン編集のフランス語版論文集全1巻 (Polanyi [2008]) である。これらの論文集の出版により、ポランニーが多くの雑誌に発表した雑誌論文に接することが可能となり、思想家ポランニーを研究する基礎が固められた。本訳書はこの国際的研究動向に倣すものであり、ドイツ語版論文集に収められた論考10本 (第1章、第2章、第3章、第4章、第5章、第8章、第10章、第11章、第12章、第13章) およびフランス語論文集に収められた論考11本 (第1章、第3章、第5章、第6章、第7章、第10章、第11章、第12章、第13章、第14章、第15章) を収録している (第9章は『大転換』の最終章)。本訳書が日本語読者のポランニー像の深化に益するところ、大きなものがあると思われる。

本訳書の編者の若森みどりは、「解説 ポランニーの市場社会批判と社会哲学」で、ポランニーが生涯にわたって取り組んだ問題は自由をめぐる問題であるとして、次のように編集のねらいを述べている。

「社会主義理論家・ジャーナリスト・教師・経済史家・経済人類学者・経済社会学者といった多様な専門家の顔をもつポランニーは、生涯にわたり社会学者として、次のような本質論的な問を発信しつづけた。——市場社会と人間の自由はいかなる関係にあるのか。人間の自由と社会主義は両立しうるか。市場社会の危機とファシズムの台頭とはどのように関連しているのか。民主主義はなぜファシズムの支配と第二次世界大戦の勃発を防げなかったのか。市場ユートピア（経済的自由主義）はなぜ繰り返し経済成長と社会改革のプログラムとして登場するのか。経済はどのように社会に埋め込まれてきたか。市場社会を超えて自由な産業社会を構築することは可能か。これらの問は彼にとって、二〇世紀が経験した受難の解明をめぐる本質的な問であると同時に、人間の条件についての考察の要諦をなしていた。本書は、このようなポランニーの思想と行動の根底にある彼の社会哲学に証明をあてることを意図して、カール・ポランニー政治経済研究所のアーカイヴから関連する論文や草稿（遺稿を含む）を選び、編集したものである。」（314頁）

編者の意図はほぼ満足させられているといえよう。第2章「自由について」（1927年）によって、ポランニーの社会主義論が彼の自由論と密接に関わっていたことを、われわれは知ることができる。

また、第4章「ファシズムの精神的前提」（1933年）で、ポランニーが「民主主義はキリスト教的な自由と平等の教説の遺産にはほかならない」と宣言している（90頁）ことから、彼にとっての「キリスト教的な自由と平等」の重要性を伺うことができる。さらに、第6章「共同体と社会」（1937年）では、キリスト教的立場からの社会批判の論理がマルクス主義へ向けられている。

「マルクス主義的社会主義は、いつでも暗黙のうちに、社会が完全でありうると想定している。そのような想定は、国家や社会はその性質ゆえに不完全であるとするキリスト教徒にとって無縁である。共同体は社会を超える。いかなる社会も共同体の実現でありえないのは、人間が邪悪だからではなく、社会が必然的に不完全であるからだ。権力や価値は社会に内在している。人間のいかなる形態の協働も、政治的・経済的な強制によって特徴づけられている。人間存在の不可避的な選択肢には、われわれがさまざまなタイプの権力のあいだで、また権力が行使されることになった使用形態のあいだで選択せざるをえないことが含まれている。われわれは権力を生み出さないという選択をすることができない。あるいは、ひとたび権力が創出されたならば、権力の行使に影響を与えないという選択をすることができない。……理想的な社会とは、われわれの選択の責任をわれわれ自身で引き

受けることによって、人間存在を、十分に責任を担えるものとして考えることができる社会であり、そして、選択のできない場合には仲間の生活への強制や干渉に対するわれわれの責任という避けられない重荷を意識的に担うことを可能にする社会である。／真の自由は、選択が可能なきときにはわれわれが自由に選ぶことができるかどうかによって、選択できない場合には共通の悪を分かち合うことができるかどうかによって、測られる。」(132-133頁)

解説者の若森みどりは、「共同体と社会」以後のポランニーは、1920年代の構想を撤回し、「規範・当為としての共同体概念が希薄で(しばしば「完全な社会」を想定し)共同体を社会に還元する傾向のあるマルクス主義と、社会編成のあり方を無視して共同体の実現を希求するキリスト教の双方を批判しながら、社会の現実を受け入れたうえでいかに人間の自由(自分の行為や選択が他者に与える影響に対する責任を担うことを通しての自由)を現実の制度的変革を通して拡大していくか、という論法で自由論を議論するようになる」(318-319頁)とまとめている。このようなまとめ方が適切であるか否かは別として、オーストリア時代のポランニーとイギリス時代の彼との間には、思想の中心にある自由の概念が持続しつつも変容を見せていること、この変容にはキリスト教に対する態度が密接に関わっていることが、テキストに触れることによって確認できる。

第二次大戦後の諸論文では、資本主義体制と社会主義の変容を踏まえて、自由の問題をポランニーがどのように考えたのかを示す論考が訳出されている。第10章「普遍的資本主義か地域的計画か？」(1945年)では、自由主義的資本主義にしがみついたアメリカ的思考様式が批判され、第11章「議会制民主主義の意味」(1945年)でも、民主主義と資本主義を同一視するアメリカ人の発想が批判されている。またイギリスの民主主義が自由と寛容という点で最もすぐれたものであることが示される。第12章「経済決定論の信仰」(1947年)では、自由と資本主義の結合というハイエクがしがみついている幻想は「市場社会においてのみ有効な経済決定論」(254頁)であると批判される。第13章「ジャン・ジャック・ルソー、または自由な社会は可能か？」(1950年代央)では、「自由な社会は民衆文化の理想と分ちがたく結びつけられた」(278頁)のものであることが強調され、第14章「自由と技術」(1955年)と第15章「アリストテレスの豊かな社会論」(1959年)では、産業文明と自由というテーマで、技術と自由、効率と自由という問題が取り上げられ、市場原理主義を克服する産業文明という問題を提起している。大戦後のポランニーの自由論は含蓄の深いものであるが、その内容は微妙に変化していて、その全容を掴むには努力を必要とする。読者はポランニーの文章にあたって彼の意図するところを自分で考えねばならない。

日本語読者が、ポランニーの全生涯にわたる思想的営為を、自由という概念を軸に捉え直す、という作業の基礎は本訳書によって据えられたといえよう。若森みどりの著作もこの基礎作業を踏まえた仕事として検討されるに値するものであろう。

最後に、民族理論を中心にオーストリア社会民主党内部の論争を研究している評者としては、1920年代のポランニーの思考に焦点を当てて、本訳書の読後感を記してみたい。

本訳書における1920年代の論考は、第1章「われわれの理論と実践についての新たな検討」（1925年）と第2章「自由について」（1927年）である。この両論文を読んで受ける印象は、この時期のポランニーが基本的に狭義の「オーストロ・マルクス主義」の枠内にいる思想家であったということである。

オーストロ・マルクス主義は、広義には、カール・レンナーやドルフ・ヒルファディングを含み、最広義にはカール・カウツキーをも含むオーストリア社会民主党のマルクス主義者たちを指すが、狭義には、マックス・アドラー、フリートリヒ・アドラー、オットー・バウアーなど、1920年代にオーストリア社会民主党の指導権を握った左派のマルクス主義者たちを指す。ポランニーはこの流れに棹さしていたと考えられる（Chaloupek [1986] は、オーストリア学派とオーストロ・マルクス主義の論争の中でのポランニーの議論を検討している）。

第1論文が、F・アドラー編集の“*Der Kampf*”に掲載され、第2論文も掲載が予定されていたことに表されているように、この時期のポランニーがオーストリア社会民主党左派と親密な関係をもっていたことは、第1論文がバウアー路線の「機能的民主主義」の具体的展開を論じていることとも照応している。

1922年の「社会主義経済計算」（Polanyi [1922]）に密接に関わる、ポランニーの社会主義経済計算に関する議論は、ルートヴィヒ・フォン・ミーゼス等と関連で純経済理論的なレベルで検討されることが多いが、1920年前後の社会民主党内部のレンナーとバウアーによる「社会化論争」（この論争については、Aoyama [1979] が概要を知るのに好適）を踏まえた、バウアーの実践的政治路線との関連を見逃すことができないことを、本訳書はわれわれに教えている。

ついでに言えば、ポランニーの社会主義論は、G・D・H・コールなどのギルド社会主義の影響を受けたものであり、非マルクス主義的な潮流に属するものであったとの理解がある。この様な理解は、マルクス主義をポリシェヴィズムと等置したうえで、それとの異質性を強調するものであるが、ポリシェヴィズムとオーストロ・マルクス主義との相違を無視するもので、正確なものとはいえない。

また、この時期のポランニーの社会主義論をギルド社会主義と結びつけることで、非マルクス主義的なものであったとする理解は、ギルド社会主義とオーストロ・マルクス主義の親和性を見過ごしたものでこれも問題があろう。レンナーとバウアーの「社会化論争」で議論された、生産者・消費者・自治体の各代表による三者構成原理はギルド社会主義に通じるものがあり、オーストロ・マルクス主義とギルド社会主義の関係は綿密に再検討されるべきであらう。第1次大戦末期から戦後にかけて、マルクス主義とギルド社会主義の接近の動きが各地で見られる（日本における事情については、渡部 [1969]、二村 [1976]、犬丸 [1993] を参照）。オーストリアにおけるこの時期の事情についても見直しが必要であらう。

第2論文は、第1論文における「見直し問題」が、ポランニーにおいては自由論と不可分の関係にあることを示す重要論文である。だが、「社会的自由は、社会主義においては社会的認識によって、つまり人間の個別的生活間の現実的連関を具体的に概念把握することによって成立する」（47頁）という、ここでの自由論は、F・エンゲルスの「自由とは必然の洞察」という『反デューリング論』（Engels [1877]）の自由論の枠内にあるものと看做しうる。社会主義と自由に関する非マルクス主義者とマルクス主義者の論争はいわゆる「カントとマルクス」問題として、19世紀末以来ドイツ語圏で議論されてきたものである。オーストロ・マルクス主義の代表的論客M・アドラーもこの問題に積極的に発言している（Adler [1925]）。ポランニーの自由論の変遷を測る際に、M・アドラーと比較検討することが興味深い思想史的検討の論点となるであらう。

オーストリア社会民主党左派は、1920年代には社会民主党のヘゲモニーを握ったが、稚拙な戦術的誤謬を繰り返して、与党の座を失い、1934年には準備のないままにオーストリア・ファシズムとの内戦に及び、自滅した。社会民主党左派の熱心な活動家であったエルンスト・フィッシャーは、その著作『回想と反省』（Fischer [1969]）で、両大戦間期の左派路線に対する痛苦的な反省を綴っている。同様に左派路線に与していたと思われるポランニーにおいて、その後の思想的転換にこの敗北がどのような影を落としているのかは興味深い論点である。この問題については従来のポランニー研究は目を止めていないが、1930年代のポランニーのマルクス主義との距離の拡大の問題も、この社会民主党左派の敗北問題との関連で思想史的に解明されるべきであらう。

ポランニーの生涯は、1919年以前のハンガリー時代（第Ⅰ期）、1919-1933年のオーストリア時代（第Ⅱ期）、1933-1947年のイギリス時代（第Ⅲ期）、1947-1964年の北米時代（第Ⅳ期）に区分されるが、本訳書で訳出されているのは、第Ⅱ期4本、第Ⅲ期8本、第Ⅳ期3本である。思想家はその思想の形成期において個性を発揮するものである。後期の思想の変遷も形成期の思想の特徴と照らし合わせることによって、より深い理解を得ることができる。「社会化

問題」(Polanyi [1920])などの、ポランニーの思想形成期である第Ⅱ期の重要論文は、まだ日本語読者に閉じられている。早急な翻訳、紹介を期待したい。

新たな知見を得れば、次の知識への欲求はより刺激される。第Ⅱ期の一層の紹介に対する私の期待は望蜀の感を述べたものであるが、私が本訳書から受けた刺激の大きさをもあらわすものである。このような意味でも、本訳書の刊行は、ポランニーに関心をもつ日本語読者への大きな贈物と言えよう。

参考文献

- 犬丸義一 [1993] 『第一次共産党の研究』 青木書店。
- 内橋克人 [2006] 『悪夢のサイクル：ネオリベリズム循環』 文藝春秋。
- 佐伯啓思 [2009] 『大転換：脱成長社会へ』 NTT出版。
- 佐藤光 [2006] 『カール・ポランニーの社会哲学：『大転換』以後』 ミネルヴァ書房。
- 中谷巖 [2009] 『資本主義はなぜ自壊したのか：「日本」再生への提言』 集英社。
- 二村一夫 [1975] 労働者階級の状態と労働運動、『岩波講座 日本歴史 18 近代5』 岩波書店、所収。
- 野口建彦 [2011] 『カール・ポランニー：市場自由主義の根源的批判者』 文眞堂。
- ポランニー, K. [1975a] 『大転換：市場社会の形成と崩壊』 吉沢英成・野口建彦・長尾史郎・杉村芳美、東洋経済新報社。
- ポランニー, K. [1975b] 『経済と文明：ダホメの経済人類学的分析』 栗本慎一郎・端信行訳、サイマル出版会。
- ポランニー, K. [1975c] 『経済の文明史：ポランニー経済学のエッセンス』 玉野井芳郎・平野健一郎編訳、日本経済新聞社。
- ポランニー, K. [1980a] 『人間の経済Ⅰ：市場社会の虚構性』 玉野井芳郎・栗本慎一郎訳、岩波書店。
- ポランニー, K. [1980b] 『人間の経済Ⅱ：交易・貨幣および市場の出現』 玉野井芳郎・中野忠訳、岩波書店。
- ポランニー, K. [1981] 『新版 経済と文明：ダホメの経済人類学的分析』 栗本慎一郎・端信行訳、サイマル出版会。
- ポランニー, K. [2003] 『経済の文明史：ポランニー経済学のエッセンス』 玉野井芳郎・平野健一郎編訳、ちくま学芸文庫。
- ポランニー, K. [2004] 『新版 経済と文明：ダホメの経済人類学的分析』 栗本慎一郎・端信行訳、ちくま学芸文庫。
- ポランニー, K. [2009] 『大転換：市場社会の形成と崩壊』 野口建彦・栖原学訳、東洋経済新報社。
- 若森みどり [2011] 『カール・ポランニー：市場社会・民主主義・人間の自由』 NNT出版。
- 渡部徹 [1969] 一九一八年より二一年にいたる労働運動思想の推移、井上清編 『大正期の政治と社会』 岩波書店、所収。
- Adler, M. [1925] *Kant und der Marxismus: Gesammelte Aufsätze zur Erkenntniskritik und Theorie des Sozialen*, E. Laub.
- Aoyama, T. [1979], Sozialisierungstheorie von Otto Bauer und Karl Renner: Ein Vergleichsversuch, 『経済科学』(名古屋大学) 27 (1)。
- Chaloupek, G. [1986], Die Österreichische Schule und der Austromarxismus, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 12.
- Engels, F. [1877] Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft, *Marx und Engels Werke*, Bd. 20, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, (1962). 『マルクス・エンゲルス全集』第20巻、大月書店、1968。

- Fischer, E. [1969] *Erinnerungen und Reflexionen. Erinnerungen bis 1945*. Rowohlt. 池田浩士訳『回想と反省：文学とコミンテルンの中で』人文書院、1972。
- Polanyi, K. [1920] Sozialisierungsfrage, Manuskript, in Polanyi [2005].
- Polanyi, K. [1922] Sozialistische Rechnungslegung, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*. 49 (2).
- Polanyi, K. [2002] *Chronik der großen Transformation*, Bd. 1, M. Cangiani und C. Thomasberger (Hrsg.), Metropolis.
- Polanyi, K. [2003] *Chronik der großen Transformation*, Bd. 2, M. Cangiani und C. Thomasberger (Hrsg.), Metropolis.
- Polanyi, K. [2005] *Chronik der großen Transformation*, Bd. 3, M. Cangiani, K. Polanyi-Levitt und C. Thomasberger (Hrsg.), Metropolis.
- Polanyi, K. [2008] *Essais de Karl Polanyi*, M. Cangiani et J. Maucourant (eds.), Éditions du Seuil.